

# 繕う行為によって「継承される衣服」を考察し、 衣文化向上を模索する

前 田 博 子

(2018年1月5日受理)

## Challenge to Improve the Value of Clothing Through the Study of “Inherited Clothing” Produced from the Act of Mending.

Hiroko MAEDA

要旨：Textile and clothes act as bonds to connect people with people, and people with society, and techniques to produce them are being created and developed every day. Clothes we wear are usually treated as consumables. However, they indeed support our lives daily and throughout our lifetime, and not only that, also constantly record our lives and things which happen in our everyday lives. That is why the value of clothing needs to be improved.

Key words：衣服 BORO 衣文化 衣生活

### 1. はじめに

「流行」という言葉を纏った衣服の消費速度は非常に早いため過度な生産による廃棄の問題が多く存在している。企業や団体がリサイクルやケミカルリサイクルの研究を行う中、本研究は文化的視点から衣服についての考察を深め新たな衣生活文化を提唱する。きもの文化は想いを込めて「繕われた衣服」として家族の日常を支えていた。補正や補強することで先祖代々受け継がれてきた布や衣服は多大な価値を保持し存在している。今日では既製服を購入し、流行遅れとなった衣服は廃棄されるか、古着屋やインターネット上で安価商品として扱われている。このような現状をふまえ、これまでに継承された衣服や布についての調査をおこない、それらをもとに『継承される衣服』を制作する。主な目的は衣服を消耗品として扱うことに疑念を抱かせ、「繕う」という行為を通して後世へ受け継ぐ衣生活文化を再構築するためである。

### 2. 本研究における問題提起

衣服は着用することによって他者とのコミュニケーションにつながる必須アイテムである。現在、大量生産によるコストダウンから安く洋服を手に入れることが出来るようになっている。かつて衣服は各家庭でつくられ、母親や祖母の愛情を縫い合わせたものを着用していた。ほつれや穴があいた衣服は繕いによって補正・補強されたり、小さなハギレを継ぎ合わせたりしながら着用し続けられてきた。「BORO」や「刺し子」などは母や祖母の「繕う」という行為により、着用する者への切なる想いや願いが託されていたという歴史的背景を保持している。きものは三世代継ぐものとされ、母から子へ、子から孫へと受け継がれてきていた。医学の発展が乏しかった頃、流行病にかからぬよう子ども服の背中には「背守り」が付けられ、我が子の成長を願い、無病息災を祈りながら一針一針縫われていた。また親が着られなくなったきものを子どものサイズに合わせて仕立て直されたこと。穴があけば繕い、また穴があけば繕い、それでもボロボロになっ

て着られなくなれば袋物に、もしくは雑巾として使われ、最後には畑にかえされた。物がなかった時代だからこそ物を大切に扱う文化は継承され、その文化と共に衣服やモノも継承されていた。

しかし産業革命以降、ミシンが開発され既製服が主流となった今日では、時代の流れに準じてつくられるファストファッションが現代の衣生活を支えている。これらは消費を目的とし、売上が重視されるため一着の衣服が本来の役目を果たし終える時間は非常に短い。モノが売れることの結果には労働者の生活を支えるという大きな役割を担っている。しかしつくり過ぎた結果、売れ残りは廃棄される。人々は生活のために生産し、販売する。販売から得た利益によって生活が潤い生活基盤が向上する。生きるための術ではあるもの、利益や売上を意識し過ぎた結果、それらは「流行」という言葉と共に纏われ、「流行」という言葉は次のアイテムへの購買意欲へと移行する。着なくなった洋服は捨てられるかインターネット上や古着屋で売買アイテムとして流通する。きものなどの高価なものでさえ、ヒトヤマ数万という値がつけられている。洋服、和服の価値は人が着ることによって安価なものへと価値基準が移行し「安さ」に価値を見出した人々が「安価な衣服」を購入するのである。プレミアやビンテージとしての価値を保持している衣服以外は経年変化が付加された時点でモノとしての価値が下がる傾向にある。意図的ではないシミや汚れ、やぶれなど日常生活から得られる経年を象徴する変化を個人の意志や生き方を伝えるものとして定義され評価されることはないのだろうか。

衣服は第二の皮膚と称されることが多い。それは裸でいることが少ないわたしたち人間にとって動物が毛皮を纏うように衣服を常に纏い生きているからである。第二の皮膚としての役割は主に寒さや暑さへの対応、怪我の防止や外敵要因からの身体保護、身分や職業の象徴、呪術的な行為、他にも自己実現などがあげられる。わたしたちが生を受け、生涯を終えるまで衣服を纏い続ける中で第二の皮膚は「その人らしさ」をあらわすものへと移行している。「その人らしさ」とは趣味や思考、性格や性質、特

質、職業等を含めることができる。好きな色、柄、好むカタチ、暑がり、寒がりなど衣服を通して伝わる事柄は履歴書と同等以上の価値を見出すかもしれない。これらのことを立証するため衣服による衣服の価値を高め、衣服を育み、慈しむ文化構築の礎を築く必要がある。わたしたちは消費目的で衣服を着用するのではなく、継承された品物として愛用すべきである。衣服は着るためのものであり、生活を送るためのものである。衣服は人々の営みを支えるだけでなく、生活そのものを記憶し、出来事や事象を記録していると捉えることができる。衣服についてしまった汚れやキズなどに文化的価値を見いだすことが出来れば、衣服の価値は向上するのではないだろうか。

### 3. 現代における衣服の役割とは

ファーストリテイリング（ユニクロ）のCMでも「人は、毎日、服を着る。でもなぜだろう。なぜその服なんだろう。遅刻しそうだから、とりあえずそれにするのか。気分で選ぶ？それともお天気？「これで大丈夫か」とかそれとも「周りになっているか」とか、人はなぜ周りを気にするのだろうか。人は、なぜ服を着るのだろうか。その服で気分を変えることは出来るのか？暖かい色はドーパミンを放出する。洒落た言い方をするとあなたをハッピーにする。服は自分をまもるためのもの。柔らかいものはあなたを安心させてくれる。なぜ服を着るのだろうか。正解はひとつじゃない。生活をよくするための服をつくろうと、ユニクロは問い続ける。」とわたしたち消費者に問題提起している。人が衣服を纏うための理由や意味はある程度の共通項によってまとめられる。しかしそれ以後は各人によって異なってくる。そもそも人が服を着る理由を問う必要が無いであろうと感じるほど衣服を着ることは当たり前のことなのである。現代に生きるわたしたちにとって衣服を日常的に着用することは特別なことであるはずがない。衣服の着用は当たり前の行動であり、当たり前の行為なのである。「当たり前」の根底にある本来の役割が表立つことはない。「当たり前」という行為から、わたしたちは衣服そのものを消耗品

の中の嗜好品として捉えることが多い。そのため衣服は人々の好みによって取捨選択されているのである。

人生における儀礼や行事も今やイベント化しており、節目を祝うという儀礼、儀式からかけ離れている。儀礼や行事であろうとイベントであろうとそれらは一過性の「パーティー」に含められる。SNS上に映えるための行動から衣服を選択し着用する。一過性であるなら凝った「衣」や想いのつまった「服」は必要ない。当然つくり手の意図や想い、願いなど不要であろう。見えるところまでがカメラにおさまれば映えるための衣服は成立する。SNS上では特別な自分を演出さえ出来れば良いのだから、自分のモノである必要もない。現代における衣服の役割は、一時的に個人を演出し、時に自己表現を手伝うためのものである。大げさに言えば衣服は使い捨ての消耗品であり、消費されるモノなのである。

#### 4. 調査1

過去の衣服縫製や古布等の調査を実施。

「BORO」についての研究からアミューズメントミュージアムを視察。

東北地方では麻を栽培し麻を用いた布が多くつくられていた。冬の厳しさから綿花の栽培が難しかったことや羊の家畜が遅かったためである。ものが無かった時代だからこそ道具や素材は貴重とされており、一枚の布や布の欠片でさえも大切に扱われてきている。この寒さに対する恐怖から生きる知恵を育んだと考えられ、冬を越すための工夫が凝らされている。幾重にも重ねられた布は丈夫にするためであり、防寒のためである。そこには母や祖母の家族に対する切なる願いや想いが縫い込められている。針を持つ女性は常に着用者を想いながらカタチを形成してきたのである。刺し子などに模様がみられるのは生地を分厚くするためだけでなく、装飾的な意も込められており当時の女性も現代の女性同様におしゃれを楽しんでいたと推測される。

民族学者の田中忠三郎氏は子供の頃母親から「布を切るのは肉を切るのと同じこと」<sup>1)</sup>と言われて育てられた。「着物」や「布」は非常に大切に扱われ、いつくしまれてきた。

現在、BOROやボドコ、百徳着物などの消費されない衣服の価値が向上している。ボドコは東北地方の家には必ずあった先祖代々使われてきた敷き布である。子どもが産まれる際には最初にボドコに包み長生きが出来るようにとげんがかつがれていたため、長寿の老人が使用しているボドコや子沢山の家庭で使用されているボドコは重宝した。「BORO」の文化的価値の再発見に伴い、有形文化財として保存されるようになった一方で、バイヤーやコレクターに買い占められている現状から、より「BORO」の価値が向上している。しかしこれらの価値には些か疑問が残る。本来各家庭で使用されていたものが美術館や博物館で触ってはいけないモノとして扱われている。文化的価値の向上をはかるため、それらの所在は公的な収蔵庫ではなく、各家の箆笥やクローゼット、もしくは物干しにあるはずである。文化継承が順調におこなわれるとすれば、途絶えること無く各家に文化が蓄積されてゆくはずである。

古布や継承されてきた衣服を古美術として崇めるのではなく、家の中で家の人が過ごした形跡を代々受け継ぐことにこそ意味が内在し、他人にはわからない家族内や身内での価値が温存されてゆく。ただしこれらが「愛着」という言葉や感情と共に、後世へ継承されるのかについては今後の課題とする。

#### 5. 調査2

「古代織」「原始布」についての考察から山形県「致道博物館」「米織会館」「出羽の織座 米澤民藝館 原始布・古代織参考館」への視察を行った。

仕事着と衣料（国指定 重要有形民族文化財）

北国にあっては木綿の普及はおそく、近世も後半になってからであった。木綿は長く着られるように細かにして丈夫にし、またボロになれば、これを裂いて緯糸にしてサキオリにして再生した。サシコは布を補修したり、補強するためのもので、マスザシ、山ザシ、花ザシなどの種々の文様が工夫されている。

木綿が普及する以前は麻が衣生活の主体であり、「ヌノ」といえば最近まで麻のことを指していた。自然に生育するアイタケ（イラクサ）、藤、科など

のセンイも衣料としてよく用いられた。またゼンマイの頭部についているワタを紡いで防寒用の衣類としたゼンマイ織も寒冷地ならではの着物であった。

(致道博物館展示用解説)

雪が多く積もる地域では冬に作物を収集するのは困難である。だからこそ雪が降るまでに繊維素材を収集し、雪が降り出せば家の中で布づくりがおこなわれていた。「しな織」は工程が多く、木の皮からつくられた古代織である。布に成りうるための繊維素材を収集して「ゼンマイ織」「ゼンマイ白鳥織」をつくっていたことや裂織、紙布など当時の人の知恵や生きるための布づくり、使うための衣服づくりには驚かされる。今ではポリエステルなどの生産が主流となったことと、交通の便が一貫するようになったため材料が安定供給されるようになった。そのため材料確保のための重労働が軽減された。しかし地域に根付いた文化や技術が消えることに繋がってゆく。物事の均衡化は必要な事象であるが不均衡だからこそ生まれていた文化や技術があることに気付くことができた。

調査については不十分なところもあるので今後も継続しておこなうこととする。

## 6.『継承される衣服』の成立

家族、友人、知人が着ていたものの中には思い出がつまっているものもある。特別な儀礼や行事、イベント等で着用したものは衣服を観るだけで当時の光景が思い出されることもあるだろう。着用されてきた衣服には着用者が過ごした時間や出来事を記憶し記録しているとすれば、日常の中で得られた意図しない汚れや傷は個々が持つ思い出や出来事として捉えることができる。例えば大好きな人との食事についてしまったミートソースのシミ、雨の中逢いたい人に向かって走っていた途中についてしまったドロ、自転車に乗れるようにと一生懸命練習し何度も転んであいた穴など。人が過ごした細やかな日常の積み重ねは衣服に新たな痕跡を残す。シミや汚れ、ほつれは否定的に捉えられがちであるが、それらが出来た成立を紐解いてゆけば、経年変化を肯定的

に捉えることができる。いくら洗濯しても落ちない汚れ、何度も洗濯することで繊維強度が弱まり少しずつ脆くなる箇所など、日々の積み重ねや布や衣服がもつ記録された記憶は、本人や身内の者が「後についた衣服の模様」として捉えることで新たな価値を追記することができる。その価値によって育てられた衣服は代々使用され、着用される。これらの事象を含めて衣服を『継承される衣服』と称し『継承される衣服』を制作する。

『継承される衣服Ⅰ』可変する衣服

『継承される衣服Ⅱ』余計なお世話プロジェクトによってつくられた衣服

## 7.『継承される衣服』について

人を認識する上では嗅覚や聴覚で感じる他にヒトが常に衣を纏っていることが挙げられる。わたしたちはその人の身体や顔の一部としてそのヒトらしさを心に留めておくとするならば、衣服とは第二の皮膚、もしくは皮膚よりも早くそのヒトを認識することができるのではないだろうか。

例えば誰かが着ていた服を借りたなら、借りた人のことを思い、その人を肌身で感じることや、知っている人が着ていたであろう服を異なった人が着けていても同様に、衣服の持ち主のことを思い返すなど、衣服を通して得られる記憶はそのヒトがその場にいた事、過ごした時間を証明、共有するものなのかもしれない。衣服は決して本人を証明するものではない。しかし「その人かもしれない」という考えは「その人らしさ」を無意識のうちに認識し、記憶として刷り込まれているのである。つまり衣服は日常の記憶を蘇らせることができるのである。

わたしが制作する『継承される衣服』は、亡くなったヒトを弔うものではない。肯定的にもしくは楽観的に年月の流れを吸収し、過ごした時間や場所、食べたもの、した事、起こった事などを思い出す、思い返すための記録媒体としての衣服をつくることを目的としている。

◎『継承される衣服Ⅰ』可変する衣服

子どもは母親や父親の匂いが染みついたものを好む傾向にあること。親が子に譲渡するという行為が

「継承する」「継承される」という事象をうみだすこと。この二点から父親や母親の衣服という仮設定から既存のアイテムを用いてこども服を制作する。子どもは成長とともに洋服のサイズが変わり、少し大きくなれば新しい服を買わなければならない。和服生活の幼少時期では一歳から四歳ぐらいまでは一つ身ひとえ長着（小裁ち）を着用する。そのため「まつり縫い」や「かくし縫い」により「肩あげ」「腰あげ」がおこなわれていた。子どもの成長や行動に合わせて仕様を変え着用していたためである。洋服はパターンや構造が和服よりも複雑なため数週間、数ヶ月しか着られない服が多い。和服での肩あげや腰あげを参考に衣服のサイズを変えることができれば、その服を一生着ることができるかもしれないと考え『可変する衣服』を制作。

既存の大人用衣服にプリーツやタックを寄せ、丈や幅を短くして縫いとめ、子どもが着られるサイズにする。父や母の衣服と想定した既存アイテムを子ども服へ可変させたのち、子どもの成長にともないサイズを変えてゆく。最終的にほどこことを目的としているため、強度の弱い甘熱りの双糸でつくられている「しつけ糸」により縫い合わせる。

父や母の衣服を子どもが着ることにより「アイテム」であったものが繕うという行為を通して「継承」という事象をうみ出す。それらは簡易消費を含む「アイテム」から逸脱した『継承される衣服』として成立すると考える。

大人服にハサミを入れていないため、子どもの成長とともに縫い止められた箇所をほどこしながら着ることができる。成長により着られなくなった衣服を捨てることなく着続けるための試作である。月日の流れとともに子どもが成長し、その成長のたびに糸をほどこいてゆくの、少しずつ大人サイズへと丈や長さを調整できる仕様となっている。

柄も洋服のデザインと同様に「流行」という言葉を追いながらつくられているが、衣服を着用し続けることによってその人なりの柄を衣服に宿してゆく試みも含まれている。日光により色が褪せてゆく様子や無意識についた汚れなど日常の記録を写しとることができる。これは成長を目視しながら一生着る

ことのできる衣服としての提案である。親の洋服で遊んでいた子どもは親を感じながら着用することができるかもしれない。また「着る」という行為を通して父や母とともに眠る感覚をえられるかもしれない。一生着続けるということは常に「その人らしさ」を他者に刷り込むことができ、「その人らしい柄」正確には「その人が付けてきた柄」を永続的に宿すことを可能とするのである。（図1、図2）



図1 可変する衣服



図2 可変する衣服 食事による着彩

### ◎『継承される衣服Ⅱ』余計なお世話プロジェクト によってつくられた衣服

人々は年月を過ごし生きている。経過してゆく月日の中でおいたちを感じ、そして加齢を感じる。お食い初め、七五三、成人式、厄除け、長寿の祝（還暦、古稀、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿）のような人生儀礼、行事が存在する。このたび本学職員が還暦を迎えるにあたり、そのお祝い会に便乗し、「赤いちゃんちゃんこ」を制作した。これは「余計なお世話」を主としているので、頼まれてもいないのに勝手に良かれと思って行動し、勝手に制作するプロジェクトである。（図3、図4）



図3 赤い布、衣服を提供してくれた方々



図4 還暦祝 赤いちゃんちゃんこ

本来の衣服制作と異なる点は洋服用のパターン制作や縫製をおこなっていないことである。関係者から赤い布や衣服を収集しそれらを再構築し、縫い止めることによって衣服を制作している。職場の仲間から集めた布や衣服から制作した衣服を纏ってもらうことで、よりつながりや想いのこもった衣服に仕立てることが主な目的である。また、集められた衣服や布で使用しなかったものは更に手を加え、もとの持ち主に返却する。「還暦」という人生儀礼を家族ではない人々が祝うこと自体が一過性イベント感を演出すると疑念を抱いていたため、参加者や協力者へ一過性イベントではないという考えを根付かせることが重要であると感じた。返却された衣服や布製品を「つかう」もしくは「みる」ことにより、当時の光景を思い出させる仕掛けの試みである。一つの衣服を完成させることだけに目的をなしているのではなく、祝った人々にも思い出を共有し、還暦の「イベント」ではなく、「人生儀礼」としての役割を担って欲しいとの想いを込めた。日常的な衣服とは異なり一過性の出来事で着用した衣服はその出来事や行事が終了した時点で不要とされる。しかし今回の制作では赤いちゃんちゃんこの他に生地、衣服提供者への品物制作もおこなっているので、協力者全員が思い出の品物を持っているという観点から「捨てる」という選択肢の横に「残しておく」という選択肢を用意した。これらは思い出の集積物、感謝の意思表示、つながりの乗算として価値あるモノへと意識を誘う試みである。これらの仕掛けや試みから『継承される衣服』が残されてゆくのかはわからないので引き続き制作と研究を並行する。

### 8. まとめ

衣服とは「消費されるもの」「消耗されるもの」として扱われがちであるが、「そのヒトを特定するもの」「そのヒトを想像させるもの」「成長を記録するもの」「日常を記録するもの」「日常のアクシデントを記録するもの」であることがわかった。展覧会への出品から、日常的に着用するものを展示作品として展示したことで、着用モデルは衣服についてのシミや汚れから何を食べていたかを思い出していた。

まだことばがおぼつかないので、成果とよべるものではないが、自身が着ていたという記憶から知っているであろう言葉を幾度も発していたのが印象的である。勿論、衣服に付いた「汚れ」「シミ」だけでなく衣服についた「匂い」も相俟ったことは承知している。今回意識的に着色力の強い食べ物（ミートスパゲティ、カレー、焼きそば）を食させ、衣服にシミがつきやすいようにと操作したことを追記する。

衣服に付着するものは経年を象徴する柄だけでなく、その人の体内から放出される匂いも付加される。柄や匂いが共に記憶、記録表現できたなら、その衣服は本当に着用者の映し鏡として成立するのである。これらの衣服がもたらす効果や影響は大それたものではない。人々を包括し装飾している衣服は、成長と共に歩み成長の傍らでそっと寄り添いながら日常を記録する。ましてやそれらを他人にみせる必要はない。しかしSNSでプライベートを切り貼りしている者も多い。他者とのつながりが画面上だけで成立するのには些か疑問が残るが、日常に生きた「証」としての証明は「モノ」である必要がある。「モノ」に宿された形や色、柄がそれ以外の記憶媒体を超えることはないだろう。洋服の柄は本来であれば、シーズンやブランドコンセプト、そして「流行」を加味したものとして生産され消費、消耗される。しかし衣服につけられた「その人が付けて

きた柄」は生活や日常、非日常など起こり得たアクシデントを記録した装飾として捉えることができる。

わたしたちは常日頃の出来事や事柄、思い出など衣服を着用している間ずっと記録し続けている。汗をかくこと、ごはんを食べること、汚してしまうこと、それらは勲章と呼べるほど誇らしいものではないが、日常の小さな積み重ねは勲章に似た証となり、一点物として価値を一人一人に宿することができるのかもしれない。ひと一人が成長し、死に至るとき「衣」「服」が心に留めておきたい事象や過去の出来事を語れる媒体となり得たなら、各家々に先祖代々受け継がれてきた衣服が存在するかもしれない。「衣」「服」には生活や日常での出来事、各人の生活の「場」での活動を記憶する役目を担っていると言えよう。

## 引用・参考文献

- 1) 田中忠三郎『物には心がある。』アミューズエデュテインメント162頁～165頁 2009年

## 参考文献

- 鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』筑摩書房 2006年  
小出由紀子、都築響一『BORO』アスペクト 2009年  
出羽の織座 原始布・古代織参考館『原始布—今、見つめ直される北からの衣文化』2002年  
婦人生活出版部『和服裁縫全書』婦人生活社 1964年